

〔論文〕

八木重吉の詩に於ける死の美化について

堀 剛

1

現代詩の技法や、詩についての理論への影響と言う意味では、いまさら八木重吉でもあるまい。およそ、現代詩を読み書きするものにとつて、もはや技法上では影響力のない詩人の一人であろう。しかし、八木重吉の詩集『秋の瞳』、『貧しき信徒』などは体裁を変えて出版が継続されている。あるいは全集にまでなって時代を越えて読まれて来た。その理由は、八木がキリスト教詩人として、文学界よりもキリスト教界で読まれていることに一因するだろう。信仰詩人として八木が読まれる場合は、彼の一部の秀作とされるもののみが注目され、この詩人を必要以上に美化する傾向が強いように思われる。だが、八木の膨大な作品の全部を読んでもみると、自殺を肯定しているような詩が書かれてもいるし、時代の反映であるかもしれないにせよ、外国人への敵視が如実に露呈されているものもある。大抵の場合、八木重吉を論じる人々は、このような問題を含む作品には目もくれず、ひたすら人気作品にのみ目を配ろうとする。

そのような中で、1997年2月発行『日本詩人選14 八木重吉詩集』(思潮社)に収められた郷原宏の解説「八木重吉の世界」は、これまでの識者らの権威づけを離れたところで八木の論評を試みようとするものである。郷原は冒頭から、八木への評価について「・・・大詩人をとるか小詩人とするかは、要するに個人的な好みの問題に帰着するほかはない」と述べ、いわば八木は小詩人に過ぎないと言い切りつつも、そのような八木へのこだわりを次のように言う。「・・・私たちは詩を読むときに、そうした公的な基準によらず、もっと自分の資質に引きつけて読むことに自信をもっていいのである。・・・私は八木重吉の詩が好きである」(前掲書 p212)。郷原のどことなく弁解じみた論評の背後には、八木の作品へのいわゆる現代詩の世界からの評価が微妙に関連していることは間違いない。八木をあまりにも美化し、最高視するかのような論調が片方にあり、他方では、かつての時代の佳作ではあっても、八木の作品は技法上では忘れられざるをえないものの一つではないという現実が存在するからである。郷原はその意味で真摯に八木の作品に良心的な視線を

向けながら、これまでの極端な美化を避けつつ、八木を読もうとする。しかし、郷原も言うように「八木重吉は作品以外の場所では一度も自分を語ろうとしなかった。・」(前掲書 p224)のである。だから、八木重吉論はどうしても好きなように詩人を論じて、如何様にでも賛美もできるのである。だが、なお郷原は慎重に八木を論じようとする。そして、八木重吉に特有な「かなしみ」のようなものの源泉を、彼の幼少の頃にも目を配りながらも、結局、明確に確かめることは出来ずに、次のように言う。「つまり、詩を書くことによって、それまで心のなかにあったものが「かなしみ」として昇華され、その「かなしみ」がまた新しい詩の源泉になった」。(前掲書 p.227)更に、「詩とかなしみとキリスト教は、三位一体となって八木重吉を決定していくのである」。ここで、郷原は三位一体というキリスト教用語こそ使用するものの、八木の詩とキリスト教というものの一体性を曖昧なテクニカル・タームで説明しなければならないのである。すなわち、八木の詩には少なくとも多面性を認めねばならないし、それらは時には信仰というよりは、あまりにも人間的な嘆きの方に接近することを郷原は読みとっている。郷原の論評がそのような視野を持ち合わせているという意味では、これまでに書かれてきたどの論評とも異なっている。ところで、郷原宏のこのような論評を離れて、これまで八木がいかにか過大な評価を受けてきたか、あるいはキリスト教詩人として扱われながら、八木の作品の一部のみが信仰詩としてクローズアップされて来たという事実が存在する。本稿では、そのことを作品に触れながら指摘したい。

たとえば、八木の詩には「死」という言葉がかなり多く使われている。「死」は八木にとってばかりか、誰にとっても大きなテーマである。それは美意識と感傷で表現され、死に関する八木の主張は虚無的にすら響いてくる。八木は病弱な人であったので、彼の詩のさびしさは、持病の結核や体調の悪さという特殊性と切り離しては考えられないものであろうが、そこでの八木の「死」についての見方は暗く、さびしい。八木が自分の詩の世界に埋没していく中で、八木個人が生と世界との関係をいかに捉えていたかも更に問われねばならない事柄である。彼の生と世界との隙間は詩の中で何度も唄われはする。だが、それはおよそ信仰詩の視点から「死」を論じているというよりは、あまりにも虚無的であると言えよう。あるいは、そこに存在する時代への無責任さをあえて信仰の世界によるものであるというならば、パウロ主義批判で展開されてきた現実逃避の問題性と通底するものがあると考えてしまうのは邪推であろうか。

パウロ主義批判は日本キリスト教団の場合、1970年の万国博覧会へのキリスト教館出展問題との絡みの中で、キリスト教批判として登場したものである。問題となったのは、パウロ書簡の記述の中で、ローマ書13章の教会と国家権力との関係であり、更に第1コリント書7章17節以下の奴隷制の容認、第1コリント11章2節以下の女性差別等が批判的に読まれた。特に、万国博覧会という行事は、戦後のアジアへの経済侵略に日本が成功し、経済復興したことを象徴する国家行事であり、これにキリスト教が手放しで参加することは、軍国主義へ迎合した戦時下のキリスト教の歩みと同じ事を繰り返すことではないのかということが問題となった。パウロ主義はこのような現実の問題に対して、目をくれようとせず、ひたすら信仰という観念の世界への逃げ込みとして問題視され

た。

ところで、『戦時下抵抗の研究Ⅱ』(同志社大学人文科学研究所編p431みすず書房、1969)に収められている対談集にて篠田一人は次のようなことを述べている。「抵抗のこのような形態でいちばん問題になるのは、外に現れる行動がどうだったかということよりも、むしろ関係者の内面的意識の在り方ではないでしょうか。たとえば安藤肇の『あるキリスト者の戦争体験』から引用しますと、軍隊に入って准尉に「お前はキリスト教だが、天皇とキリストとどちらが偉いと思うか」と質問され、「天皇の方が偉いと思います」と答えたとき、その人は、「これで軍隊の生活も、どうやらトラブルなしにすごせそうだ」と考えた。つまりかれは、そのとき、こういう答え方をすることによって、何かを防御したのだと思った。・・彼は受難者として自己を意識しており、背教者だという意識は無かった。・・・」ここに、キリスト教が現実の問題からいくら切り崩しを受けても、保持すべきものを内面において保持しさえすれば、それで信仰は守れたものであるという観念の世界が巧く言い当てられていると思われる。それが日本でのキリスト教の資質であるとするならば、八木もまた同じ線上に存在すると言える。そうだとすれば、八木を批判する前に、信仰とは、八木のように内的世界へ埋没することを容認するものが、否応もなくついて回るものでしか無いのであろうか。魂の救いを求めることは、自ずと自己中心的な観念的なものとならざるを得ないのか。信仰は、常に社会性とは対極の位置に立たねばならないのだろうか。あるいは八木の生きた時代もまた同じくそのような観念的なものとしての信仰の保持が奨励された時代であったということなのだろうか。

八木は幸いにも、一見してそれとわかる戦争詩など書いてはいなかった。しかし、八木が没頭する観念の世界には巧妙な時代への責任放棄が潜んではいなかったであろうか。彼は1898年(明治31年)に生まれた。1918年(大正7年)には小石川福音教会のバイブルクラスに出席し、1919(大正8)年、本郷東片町96番地駒込基督会にて受洗している。詩作は主に1921年より1927年(昭和2年)の死去に至るまで続けられた。この時代の背景の大きな事件と言え、1910年の日韓併合があり、1923年には関東大震災、1925年には治安維持法が公布されている。このような政治状況下の中で、八木の詩の持つ響きはいかなるものであったのか、以下に作品を挙げて見て行きたい。

2

1925年(大正14年)八木重吉処女詩集『秋の瞳』と1928年の『貧しき信徒』の二冊のみが八木自身によって発表されたものであり、その後1942年(昭和17年)山雅房版『八木重吉詩集』が発行されているが、それは彼の死後のものである。それら以外には詩稿として八木自身が約五十篇ずつくらいの作品を自身のノートとしてまとめていたものがあるが、ほとんど未発表である。

詩集『貧しき信徒』が発行されたのは、1928年(昭和3年)2月20日であり、八木の死去から四カ月後にあたる。特に注目されているものを『貧しき信徒』より抜粋する。

風が鳴る

とうもろこしに風が鳴る
死ねよと 鳴る
死ねよとなる
死んでゆこうとおもう

およそ詩というものは読者の共感をして初めて響きを獲得しうるものである。同時に、詩は読者を未体験な世界の中に引き入れて、新しい発見を与えねばならない。その意味で、八木の詩はあまりにも安易に「死」を発語する。「死」が何であるのかという八木自身の前提を読者に期待しているのか、「死」というものが何であるのかを、この詩自体は風という過ぎ去るもののモチーフに重ねて語ろうとする。

関谷祐規による『貧しき信徒』出版直後の書評(田中清光、吉野とみ子編『八木重吉・未発表遺稿と回想』p.119、麥書房、1971)では、この詩について次のように述べられている。

「これは通リーペンの宿命感や心細さ、安価なセンチメントが書かせる詩ではない。ここにうたはれている「死」こそは実に輝かしい生命の躍動だ。この詩には音響からくる美しさとのひがある。とうもろこしの葉は「シネシネ」と鳴るのだ。秋風のなかに「シネシネ」と野末で鳴っているのだ。だからここにたたくむ良寛は「死んでゆこう」と思うのだ。まことに素朴の極致だ。まことに単純化された詩の力だ。これは永劫の暗示だ。何げなくはうり出されたこの僅か四行の詩に幾百千の言葉をつらねてしても表はし切れぬ涙がある。人生がある。私は悠久たる世の寂寞を思うのである。虚無はあらゆる詩人が吸うよき煙草ではなかろうか。私はここに悠々としてその煙草をふかして秋に居る八木重吉の姿を思ひうかべるのである。」

仮に関谷の言うように「虚無があらゆる詩人が吸うよき煙草」なるものだとしても、それなら、果たして死はそれほど美化されるべきものであるのか。仮に、八木のこの詩までも信仰詩というジャンルで読まれるとすれば、キリスト教とは、かくも死を美化する宗教であったのか。関谷の書評は次のようにも言う。「君には家族への愛の詩が多く、すべて真剣な心情の溢れたものである。それとクリスチャンとしての深刻な信仰の詩である」。(前掲書p.118)誉め言葉で埋められたこの書評は、いみじくも八木の精神の中の虚無としての死への願望と信仰という互いに本来反発し合うべきものが同居していることはかろうじて認めてはいる。ただ、八木の詩の問題性は、死への願望と信仰による抵抗という精神の葛藤について語るものが皆無であるという点を見落とすことは出来まい。ここに八木の作品に於ける問題点が存在するのではないだろうか。

同時代の中西悟堂は、『貧しき信徒』の読后感想を昭和3年8月号『野菊』に発表している。(田

中清光編『八木重吉文学アルバム』p.79、筑摩書房、1984)ここでも同じ「風が鳴る」について論評され、次のように語られている。

「死を見つめて悩んだ八木さんの心の鼓動が感じられ涙ぐみ、且つ尊いものを覚えます」。

関茂著『八木重吉』(p66、新教出版社、1965)では、佐藤惣之助の『詩之家』に「風が鳴る」が発表されたことが記されている。八木は佐藤に「どうもわたくしは気が弱いので、ときどき死んでしまおうと思います。死んでもいいような気がするんです」などとつぶやいたことが述べられている。八木の心には、死を美化する意識と虚無意識が同居していたのかも知れない。そうだとすれば、八木は死への願望とキリスト教信仰との狭間でどのように葛藤していたのであろうか。八木にとって死とは何であったのか。次に、1925年(大正14年)に八木自身が発表した「ことば」という白選詩稿の中から、八木の言う「死」を問うてみよう。

すこし死ねば
すこしうつくしい
たくさん死ねば
せかいは
たくさんうつくしい

(『八木重吉全集』第2巻、p.104、筑摩書房、1982年発行、以下「全集」と表記する)

一人を殺せば殺人になり、多くを殺せば英雄となるとは、チャップリンの『独裁者』の中の皮肉な言葉である。八木は死ぬ主体が誰であるのかを述べることもせず、いきなり少し死ねば少し美しく、多く死ねば世界は多く美しいなどと述べる。こんな事を言えば、この詩は別に死者の数を言っているのではなく、死の深さのようなものを歌っているのであるという反論が出るかも知れない。だが、このような表現をしようとする者は、「死」の何について語るのかを読み手の判断に委ねるのではなく、表現として事前にイメージの限定を提供して置かねばならない。この詩は八木が27才、亡くなる2年前のものである。「たくさん死ねば/せかいは/たくさんうつくしい」という言葉の中に、現代のオウム事件などとも共通した無責任な全体主義の臭いを嗅ぎとるのは筆者の邪推であろうか。この詩の書かれた1925年、治安維持法が施行された。いわゆる大正デモクラシー運動の終わりの頃である。あるいは遡ることが許されるなら、1904年八木が満6歳にして日露戦争が勃発、1910年には大逆事件、日韓併合。やがて16歳の1914年第一次世界大戦が起こり、1918年シベリヤ出兵。1923年25歳にして関東大震災が起こり、「国民精神作興に関する詔書」が出される。八木はこのような時代を生きて来たのである。時代が更にファシズムの方へ流れ出そうとする頃である。死は美しいという八木の詩は異様な現実逃避とも見て取れる。死を賛美する八木の個人的思惑

がいかにあれ、八本のいう「死」は美意識に直結し、それは前に述べたパウロ的キリスト教の現実逃避の側面に呼応すると言っても過言ではないだろう。

次に、1925年(大正14年)結核で亡くなる2年前の『詩稿』と『貧しい信徒』でも発表されている「柿の葉」という詩について述べよう。

柿の葉はうれしい
死んでもいいといったような
みずからをなみする
そのすがたのよろしさ

死への近親感を柿の葉に感じ取る意識は、すでに八木が死を受け入れようとするかのごとくである。他にも、八木はこうした詩句を多く残している。もし、八木の詩の中に思想性と呼べるようなものをあえて拾い出そうとするならば、こうした死が美しいという観念をあげることができよう。病を克服することを断念した人間には、美しいものとして死を迎えることこそが、魂の平安を誘うのか。そこへ、キリスト教のような信仰が同居する。八木特有の世界が作り出されている。

ところで、あえて確認する必要があると思うのだが、このような八本の死への美化は現代のホスピス運動などとは異質なものではないかと思われる。なぜなら、ホスピスでの人の在り方はいわば死を生と地続きなものとして受け入れようとするものではないのか。すなわち、死は生の延長でしかなく、だからこそ死を自然なものとして受け入れようとする。そこには死に反して、生が見劣りする現実界という発想は存在しないと想像する。よって、ホスピスの発想には死が忌まわしいものでないことを意識すると共に、人間の生きるということの意義がどこまでも肯定されているのである。ところが、八木は死を美化するという反面で、生からの逃避を意識しているのではないだろうか。八本は、死が人間の生とは切断されたものとして考えているのではないだろうか。そうでなければ、これほど死への願望を肯定的に語ることは出来ないと思われるのだが。現実からの逃避としての「死」が美しく待っている情景、それが幾度も彼の作品の中に群がっている。

1925年(大正14年)6月7日発表の詩稿「ことば」(全集2巻)の中の「断章」という作品では、八木の「死」への考え方が更に明確に出されている。

もえなければ
かがやかない
かがやかなければ
あたりはうつしくはない
わたしが死ななければ
せかいはうつしくはない

(全集第2巻、p.104)

自分の死で世界が美しくなるとは、なんと自己満足で傲慢な話だろう。恋愛の歌の中で世界はバラ色であると歌うことを、現実の世界の色はそうではないと誰も咎めはしないように、八木の詩のような表現も詩だから赦されるというものではあるまい。このような詩がキリスト教的であったり、信仰的であるというようなものであろうか。あるいは、人の心の慰めになるのであろうか。筆者は、この詩を不快なものとして受け止めざるを得ないのだが、そのような私見は離れても、ここに信仰詩人として数えられる詩人八木重吉の姿の断面があることを見逃すことは出来ないであろう。八木は世界と対峙する場を、既に死を受け入れるという場の中でしか見出せなくなっていたのである。彼は絶望して、なお絶望を自らの側へとたぐり寄せているのである。

もし、これがキリスト教信仰の詩であるとしても言うならば、これはかなり弁解を要するものであるかも知れない。死は生によって克服されるべきものとキリスト教では考える。死そのものにひたって、それを「美」と考えることなど、キリスト教には無いものではなかったか……。あるいは既に述べたように、郷原宏の言うように「詩とかなしみとキリスト教は、三位一体となって八木重吉を決定していく」という言い方で、矛盾するものを一体として読みとることしかできないものなのだろうか。同じく「ことば」からも少し引用する。

死をおもひ
死をおもひて
こころはじめておどる

(全集第2巻、p.108)

*

いってしまいたい
いってしまいたい

(全集第2巻、p.111)

*

ないたとてだめだ、
いきどほったとてだめだ、
死よ 死よ
ほんとうにしづかなものは

死ばかりである

(全集第2巻、p.114)

死についての言葉を多く含んだ「ことば」は、先述のように、1925年(大正14年)の発表である。1915年(大正4年)、17才の時、八木は日本メソジスト鎌倉教会のバイブルクラスへ通っていた。そして、1919年(大正8年)3月2日、本郷東片町96番地、駒込基督会にて富永徳麿牧師より洗礼を受けた。この頃から、既に八木は内村鑑三のキリスト再臨信仰の影響を受け始めたとみられる。1925年、処女詩集『秋の瞳』を出版し、1927年には二十九歳の短い人生を閉じた。こうした信仰の日々にも、八木は「死」を美化する作品を書き続けたようである。今日、信仰の詩人として評価される八木のこのような一面に注意が向けられないのは、あまりにも迂闊なことではないのか。もし仮に、死を美化する作品は量的にはほんの一部であると言うのだとすれば、八木の信仰詩というのも、膨大な彼の作品の中の一部に過ぎないと言わねばならないだろう。

3

草をむしれば

あたりが かるくなってくる

わたしが

草をむしっているだけになってくる

この八木の詩について、高村光太郎は次のように言う。「詩はここにあるのだ。どんな歴大な詩にしる、新奇な詩にしる、この一点をはづれたものはこけおどしにすぎない。」(高村光太郎の「八木重吉研究」は山雅房版『八木重吉詩集』1942年(昭和17年)7月20日発行の付録として添えられた小冊子である。及びこの文章は『八木重吉文学アルバム』p.115、昭和59年、筑摩書房発行に再収録されている。)「この一〴点」とは何か、高村の言葉からは具体的に指示されていない。続けて高村は言う。

「頃日、一人の気位の非常に高い友人が来ていった。今の世上の詩と称するものは皆うす汚いといった。この友人は真に心の高い立派な人であるが若し八木重吉のような詩人をもうす汚いといふならばそれは、気位の高い人の病であるところの、自己以外を決して了解し得ぬ程高い成層圏にもう突入してしまったことを意味するであろう。」

心を飾らず言葉にしたものという意味では、確かに八木の詩の中には、素朴な美が読み取れる。だが、高村の褒め言葉を普遍化するわけには行かない。この詩の中で、八木が「あたりがかる

くなってくる」と感じ取れるときには、草をむしろ自己のみを見つめるときだと言うわけだ。ここでは、八木の実存意識は社会性から遊離するのは言うまでもない。病弱で孤独な八木の姿が想像される。自分の死を社会全体の死と対置できるとすれば、ほとんどそれは実存の中に於いてのみ意味をなす。八木が「わたしが草をむしろしているだけ」という意識を他人がどうこう言うことでは無いのかも知れない。だが、作品としての完成度に於いては、作者である八木の意識が読者に反復あるいは再現されなければならない。それも無い。もっとも世界は常に自分の見る世界であると共に、構造の中に置かれた世界でもある。世界を問わずにいても、その思考の主体は世界という構造に取り込まれている存在でもある。それゆえ、作品という普遍化と共同性を備えるべき世界では、個人意識がどこまでも他者に意義あるものとして伝達されて来なければならないはずである。だが、八木はその伝達内容をここでも読者の読み方に委ねていると言える。

高村がこの論評を書いた山雅房版『八木重吉詩集』は、昭和17年の出版であり、限定五百部が発行された。八木の死から約十四年後に、あえて編まれたこの詩集の中にも、「死」を美しいものとして歌ったものが多く含まれている。編纂者は、以下の通りである。加藤武雄、草野心平、佐藤惣之助、三ツ村繁蔵、山本和夫、八木とみ子。筆者は特に山雅房版の編集内容に興味を持ちこれを入手した。この詩集は無名であった八木を詩人として再び世に紹介する大きな役割を担ったと言える。太平洋戦争の言論弾圧の渦中であってこの詩集は発行された。内容は時流に抗うことなく、むしろ死への美化は当時の日本人の精神構造そのものであつたのか。五百部の発行で、現在では入手しにくいので、もし筆者と同じ様な興味を持たれる方のために、ここに編集内容を記すことにする。

これらは、『八木重吉全集』との照合によって、各作品内容にあたることが可能である。

「石塊と語る」(大正12年編)

「私は聴く」(大正12年編)

「白い哄笑」(大正12年編)

「巨いなる鐘」(大正12年編)

「不安なる外景」(大正12年編)

「感触は水に似る」(大正12年編)

「衿侍ある風景」(大正12年編)

「暗光」(大正12年編)

「庭上寂」(大正12年編)

「無題」(大正12年編)

「草は静けさ」(大正12年編)

「土をたたく」(大正12年4月編)

「痴寂なる手」(大正12年5月編)

- 「焼夷」(大正12年6月編)
「鞠とぶりきの獨楽」(大正13年6月18日編)
「純情を慕ひて」(大正13年11月4日編)
「幼き歩み」(大正13年11月14日編)
「寂蓼三味」(大正13年11月15-23日編)
「貧しきものの歌」(大正13年12月9日編)
「み名を呼ぶ」(大正14年3月編)
「桐の疎林」(大正14年4月19日編)
「赤つちの土手」(大正14年4月21日編)
「春のみづ」(大正14年4月29日編)
「赤いしどめ」(大正14年5月7日編)
「ことば」(大正14年6月7日編)
「松かぜ」(大正14年6月9日編)
「論理は溶ける」(大正14年6月12日編)
「美しき世界」(大正14年8月14日編)
「うたを歌わう」(大正14年8月26日編)
「ひびいてゆこう」(大正14年9月3日編)
「花をかついて歌をうたおう」(大正14年9月12日編)
「母の鐘」(大正14年9月17日編)
「木とものの歌」(大正14年9月21日編)
「よい日」(大正14年9月26日編)
「しづかな朝」(大正14年10月8日編)
「日をゆびさしたい」(大正14年10月18日編)
「赤い寝衣」(大正14年11月3日編)
「晩秋」(大正14年11月23日編)
「野火」(大正15年1月4日編)
「麗日」(大正15年1月12日編)
「鬼」(大正15年1月22日編)
「赤い花」(大正15年2月7日編)
「信仰詩篇」(大正15年2月27日編)

以上の詩の各題名はそれぞれ一篇の題名ではない。これらは短い無題の詩をグループ分けして付けられている題名である。この書の終わりには八木桃子、八木陽二による跋が付記されている。

山雅房版の中から、八木が死について書いたものを引用してみよう。

秋のひとみ

死は おそろしく
死は なつかしげなる、
初恋の ひとの
乳房に 似るか、
（「白い哄笑」より）

*

ぢりぢりと生くることをおもふて
ふと「死」をおもふ甘いころ！
「生きる」すがたが
「死ぬる」すがたのなかへと、
すがすがしくひろがっていく、
（「痴寂なる手」より）

*

宿直ベヤにねようとすれば
救世軍のらしいえんぜつがかすかにきこえてくる
あのひとたちだって
いつしんいちねんのそこにうたがひもあろう
みえも虚栄もあるにはあろうが
とにかくあのいつしんがあるのだなあ
さてこの宿直ベヤの
いやにむいみに四角なこと
形式と無かんげきそのもののようなへや
食ふためとはいへ
こんな生活をくりかえしてゆく
死んでやろうといふかんげきもうせた
生きようといふあざやかなねがひもない

あるものは
ひとすぢのぜつぼうとげんめつのころだ
（「貧しきものの歌」より）

*

やすらかな
死がまつている、
いらいらとするな、
いらいらとしても、
ころのそこはやすらかにあれ
（「母の鐘」より）

*

死のうかとおもふ
そのかんがへが
ひよいとのと
ぢつに
もったいないころが
そのとこに すわってた
（「春のみづ」より）

*

あさがほ
あさがほを 見
死をおもひ
はかなきことをおもひ
（「うたを歌おう」より）

*

雨

雨のおとがきこえる
雨がふっていたのだ
あのおとのようにそっと世のためにはたらいていよう
雨があがるようにしづかに死んでゆこう
(「母の鐘」より)

*

ねがひ

血あり涙あるひとになるのだ
できなければ死のうとおもう
(「しづかな朝」より)

*

ねがひ

ものを欲しいところからはなれよう
できるだけつかんでいる力をゆるめよう
みんな離せば死ぬるようなきがするが
むりにいごちなきもちをはなれじ
いらぬものからひとつづつはなしてゆこう
(「しづかな朝」より)

*

冬

葉は赤くなり
うつくしさに耐えず落ちてしまった
地はつめたくなり
霜をだして死ぬまいとしている

(「野火」より)

*

冬

空の裾にだけみえるうすい雲は
けぶりのようなものを吐いている
あれは少なくともわざとらしいところが無い
極あたりまえな風をしていながら
死ぬことなんか
なんとも思っていないその様子につよくなかれる

(全集第2巻、p.104)

*

基督

からだが悪いままに春になってしまった
だが基督についての疑はまったく消え
何か寄りつく
すぐ手のうちの火をなげつけるような
するどい気持ちがある

(「信仰詩篇」より)

「ことば」、「美しき世界」の中の「草をむしる」等については、先に筆者が述べた通りである。更に、死への願望がテーマとなったものがいくつか存在する。そのような作品はけっして八木の作品群の中の例外では無いのである。

4

八木は内村鑑三の語る再臨信仰の影響を受けたこともあったようだ。処女詩集『秋の瞳』(1925年・大正14年)の中に「怒れる相」と言う作品がある。

ああ風景よ 怒れる
すがたよ
なにを そんなに待ちくたびれているのか
大地から生まれいずる者を待つのか
雲に乗ってくる人を
ぎょう望して止まないのか

1969年(昭和44年)白鳳社発行の『八木重吉詩集』(P.180以下)の後書の中で、編者鈴木亨がこの詩について述べている。

「重吉が実質的に詩作を開始したと考えられる時期は、大正10年である。五ヵ年にわたる欧州大戦は、すでに大正7年の末に終息し、戦後恐慌の不安な世情に、デモクラシー運動の波が広く深く浸透しつつあった。詩壇では……民衆詩派がその主導権を握るという事態がおこっている。……左翼系詩人たちもようやく戦列につこうとしていた。かかる激動期の中で、彼は詩作を開始したのだ。詩集と聖書を、読書の対照としてもっとも好んだという彼が、そんな詩壇の動向に無関心だったはずがない。従来、彼は詩壇からも時代からも超絶した詩人のように考えられがちなのだけれども、それは違う。……時代への関心の度合いも痛切であった」。鈴木はこのように述べて、この詩を八木の社会意識の表れとして引合いに出しているのこの詩はキリスト教的な終末論を題材にしたものであるが、鈴木のように、「時代への関心の度合いも痛切であった」とまで言い切ることが出来るであろうか。再臨信仰を社会意識の裏返しの現象として理解することはできても、それ自体が積極的な社会への発言と見なしうるものだろうか。少なくとも、八木が終末論的な信仰や意識を持っていたことは伺い知ることにはできる。だが、八木が社会意識をこのような終末論的な神話的なものにすり替えようとする限り、逆に、現実を逃避した意識の露呈が読みとれるのではないだろうか。

他に、八木もその時代の人であったことを思わせる詩がある。この詩は、前述の山雅房版『八木重吉詩集』に収められた1924年(大正13年)11月4日編「純情を慕ひて」という詩稿の中の一つである。

いやにすました外国のをんな
三十づらをさげてくちをむつとむすんで
しりをふりたてて元街をかつぼしていく
へん、なんのおしろいだい、
おまへらみたいな奴があるから
いつまでたつたつて地球はぐあいよくなるんだ

(山雅房版 p122)

異国の宗教であるキリスト教を信奉する八木が、安易に反欧米という時流に流された考え方を持っていたことは滑稽でもあり、奇異である。このような発想は当時の日本のキリスト教界全体のものであったのだろうか。そのことは考えてみる必要があると思われる。ただ、八木の発言は時流に即していたことは間違いない。この詩が発表された大正13年、米国による排日法案が通過している。現在では、八木のこの詩は明らかに不当な差別意識と偏見の表現と見なすべき作品である。

関茂はこの詩について次のように言う。「重吉の場合、憎しみを感ずることさえも、キリストをおもうようすがであった。その点、つぎのような憎しみそのままの表白は、重吉においてはきわめてめずらしい例と言える。・・・たいせつなことは、悩み苦しみにせよ、迷いや憎しみにせよ、それらいつさいのことにおいて重吉がすなおにごまかしなくおもてを向け、体をはりつづけたということである。」(関茂著、『八木重吉』、p.197、新教出版社、1965)

関のように読むことはあまりにも八木を弁護し過ぎてはいまいか。当時の政治的な動きとの関連を無視しては成り立たない作品ではないのか。また、あえてこのような詩が山雅房版に入れられた理由は、昭和17年というこの詩集の発行年から想像がつく。太平洋戦争の渦中であり、1940年(昭和15年)には宗教団体法が施行され、翌年にはプロテスタントの合同教団である日本基督教団が結成されたのである。1942年(昭和17年)初代の教団代表であった富田総理が、伊勢神宮へ詣でて教団成立を報告したという出来事はあまりにも有名である。このような時流の中で、八木のこの詩はうまく使われているのである。従って、関茂の山雅房版についての次のような評価にも賛同することはできない。

「この詩集に大きな意味があるのは、先の『秋の瞳』『貧しき信徒』をふくむぼう大な詩稿群のなかから、山本和夫・三ツ村繁蔵によってあらたに356篇が選ばれ編纂されたということで、いわゆる信仰詩篇も数篇あり、重吉の詩業をひとわり見わたすには、アンソロジーとしても作品の質においても最もすぐれていることである。じじつ、これによって、重吉の詩の理解者はかなり増えたのである。時代が時代であっただけ、およそプロテストとさえ見られるこの「非国民的」な詩集が刊行されたことは、それ自体興味あることであった。」(前掲書p.107)

さて、「プロテスト」といわれるほどの意味があったかどうか、すでに筆者は山雅房版の編集内容を一覽したので、筑摩書房の『八木重吉全集』などを資料として、山雅房版の全内容を一望していただければと思う。時の政権にプロテストするような詩など、八木の作品にはただの一篇たりとも存在しないのだ。

さて、ほとんど愛好精神のみで読まれ、かつ全集まで出ている八木であるが、以上のような八木の作品を読んでも、誰もがなお八木を信仰の人、信仰詩人と崇めるのだろうか。もっとも信仰は一面では人間の営みであり、暗さや怒りが露呈されて当然である。その意味では、これらの作品から人間八木を読めればそれはそれで面白いのかも知れない。だが、先にも触れたが、信仰と絶望、そして死への葛藤を八木が詩に託しているわけでもないのに、どうしても読み手は手探りで八木のイメージをこしらえることになる。

佐古純一郎は「現代詩のむつかしい理論が、八木重吉の詩をどのようにしりぞけましようとも、多くの病める魂や、つかれた魂を、どんなに八木重吉の詩が今までも慰めてき、そして、これからはげましてゆくかを見無視することは出来ずまい」と語っている。(前掲書p.177以下)しかし、どうだろう。死を美化する思想とは、病人を励ますものであるのか。このような論評に見られるように、褒めることにのみ終始し、公平を欠くものが多すぎると言える。

他に、草野心平が「日本の基督に関する詩は八木重吉の詩をもって私は最高としたい」(『八木重吉・未発表遺稿と回想』p.263、田中清光、吉野とみ子編、蓼書房、1971)などと語っているが、これも草野のキリスト教理解がどういうものであったのか問わねばなるまい。

今日、中学の教科書にさえ、八木の詩は登場する。今や文学的価値評価を定着させてきたかのように見受けられる。歴史の自然淘汰をくぐりぬけ、八木の詩が生き抜いてきたのは事実である。しかし、その背後にはあまりにも偏った八木重吉賛美が存在している。